

手記

軍隊生活二カ月半

シベリア抑留四年の記録

北海道 平久保 清

私は、大正十五（一九二六）年に北海道函館市の近く、津軽要塞司令部や函館連隊区司令部があり、更に裏山の函館山は全山が要塞地帯で軍人がいつも往来しており子供のころから軍関係の人々と接しながら生活しておりました。小学校を卒業してから旧制の函館商業学校に昭和十四（一九三九）年に進学しましたが、そのころは昭和十二年に始まった日中戦争が熾烈をきわめ学生服も帽子

も黒色から国防色（カーキ色）に変えられ、授業の中に「教練」という科目があり、軍人が生徒に直接軍事教育を実施してました。

昭和十六年、商業学校三年生でしたが、十二月八日に米英国と太平洋戦争に突入してしまいました。昭和十七年になると同級生の中から海軍飛行予科練習生、陸軍士官学校、海軍兵学校へと受験する者が多くなり学窓は軍隊へとつながっていくようになりました。私達の卒業は普通ならば昭和十九年の三月になるのですが、軍需会社の人手不足を補充するため三カ月早く繰り上げ卒業ということで昭和十八年の十二月に社会に押し出されてしまいました。

私は、当時国策として奨励していた満州（現在

の中国東北部）への就職を希望し、奉天（瀋陽）の南方六十四キロの所にある本溪湖煤鉄公司という日満合併の製鉄会社に就職しました。この会社は満州重工業傘下の会社であったため渡満の前に新入社員は日本全国から茨城県の友部にあった訓練所に集められて一カ月間の教育訓練を受けたので、実際に会社で仕事を始めたのは昭和十九年の二月中旬でした。会社は無煙炭や低燐銑鉄を産出していて社員数は日本人が約六千三百人、中国人が約五万二千人という会社でした。辞令には総務部人事課勤務を命ずるとあった。それからの毎日算盤を離すことのできない統計事務が仕事でした。住居は会社の独身寮、「青年塾」という鉄筋コンクリート建の建物で室数は約百六十室、この独身寮の前の広場で一週間に半日、入営前の若い社員は在郷軍人による銃剣術の教育が行われていました。しかし日曜日などには同郷の男女社員で連れだって奉天に遊びに行き、デパート回りや映画見物をしたり近郊の景勝地を訪れたり楽しい時間

を過ごすこともできました。昭和十九年になると徴兵適齢が一年引き下げられ十九歳で徴兵となり次々と適齢者が軍隊に送り込まれていきました。昭和二十年の二月に私は徴兵検査の通知を受け地元の小学校で検査を受け甲種合格となりました。そのころになると米軍に日本本土が空襲され始めた情報が伝わってきたが空襲は本土ばかりではなく私達の会社にまで飛んできました。会社の溶鉱炉を目掛けてアメリカのB 29が爆弾を落としましたが一発も当らず皆近くの道路に炸裂しましたが、その威力は凄まじいものでした。もし爆弾が住宅街にでも落下していたら多数の犠牲者がたののではないかと思うと不幸中の幸いでした。昭和二十年の五月初旬に軍隊への入隊通知がきました。入隊の部隊は公主嶺の二五二四部隊（別名機動三連隊）でした。五月下旬に奉天に集合させられ関係者に引率されて公主嶺に向いましたが、以前は入隊時には会社の社員が大勢で駅まで見送りに行き激励したものが、私達の時は、駅頭での見送りは一切

駄目で、こっそり出発するようにとのことでした。出発の日には汽車の出発時刻の一時間前に会社の職場に行き、入営の挨拶をして駅に向いました。駅は会社の窓から見えるぐらいの近い場所なので駅の待合室で汽車が入るのを待っていると、一カ月前に入社した富山県出身の新入社員の沢田君が息をはずませながら走ってきて「お世話になりました。元気で頑張って下さい」と小さな袋に入ったものを置いていった。汽車に乗ってから開けてみたら、「ゆで卵」が五個入っていた。親切な気持ちに感謝しながら車中でご馳走になった。公主嶺の部隊に到着した時の感じは、何かしらヒツソリとした感じだった。後で聞いた話だが、先に居た兵隊はほとんどが南方に転進したということでした。部隊に入隊した時は広場に新兵が集められ若松部隊長から訓示があり、その後各中隊に編成され、いよいよ軍人としての教育が始まった。中隊長は石井中尉、直接の教官は谷口見習士官、班長は山田軍曹、中隊の新兵を一見したところ身体は頑健

そのもので全員が甲種合格であったことがわかった。そして多くの新兵が満蒙開拓少年義勇軍の出身者であった。満蒙開拓少年義勇軍の少年は茨城県の内原にあった訓練所で全国から募集されて一定の期間「満蒙開拓」の先兵としての訓練を受け満州国に送り込まれ、銃の代わりに鋏を持ち、広大な土地を耕すという、いわば屯田兵の青少年版という人達であった。

講義の際に「機動部隊の目的」について説明があったが、要するに不意打ち的な攻撃で敵に多大な損害を与えることであった。毎日の訓練の一つ一つの積み重ねがすべて目的達成につながるの教えられたことは常に復習して記憶しておくようにとのことであった。先ず始まったのは耐久力をつけるための長距離の駆け足、もちろん、軍装で銃を担いでの駆け足なので落伍者も出る始末だったが、私は学校時代に硬式野球で走力や投力を鍛えていたし、冬はスキーで走力や滑降の技術を会得していたので走ることは得意だったから余り苦

にならなかつた。その次は防毒マスクをつけての駆け足、これには全員がほとほと参つてしまった。真面目にマスクをつけたら呼吸ができなくなつてしまうので、少し隙間を作らないと苦しくて大変。隙間を作つたところを教官に見つかるとお目玉がとんでくる。また対戦車攻撃と称して急造爆雷(三十センチ角)を自分達に向つてくる戦車のキャタピラの前に置いて自分は素早く身を翻ひるがえして逃げてうつ伏せになり両手で両目、両耳を覆うという訓練をさせられたが、これは人一人と戦車一台との交換を意味していると思われた。手榴弾投げの訓練の時間が私にとって一番楽な時間であつた。私は中隊で手榴弾の投力が六十メートルと最高だつたのでいつも教官の助手をさせられていたからだ。また夜間演習も訓練の中にあり敵の幕舎攻撃や弾薬庫の破壊訓練などもさせられたが、ある夜の弾薬庫の破壊訓練の際に隣の班の兵が電氣の流れている鉄条網に接触して上半身を大火傷してしまい大騒ぎをしたこともあつた。また班長からは

「君達は、この先幹部候補生の試験を受けるだろうから戦陣訓などをよく勉強して準備をしておくように」とも言われた。

入隊して欲しい二カ月経つたころ、演習に出掛けると言つて中隊全員が有蓋車に乗せられ行先も告げられずに出発した。後で分かつたのだがそこはロシアのウラジオストクに近い東満州の汪清という場所の山中であつた。この時の行動は秘密裏に行動したのか夜に行われた。そこでの演習というのは陣地構築であつた。先ず宿舎は天幕を張り基地を作り銃をスコップに持ち替えて糧秣庫作りが始まつた。半地下の木造で、柱は丸太の皮を剥いだものを土中に打ち込み、それに板を打ち付けていった。簡単に言うとな頑丈な物置という感じだつた。建物が出来上がると次は麓の駅に輸送してきてあつた糧秣を山の中の建物に運び込む作業が始まつた。駅から山中の建物までは約二キロあつたが、すべて担いで坂道を登るので小さいものはあまり負担にならなかつたが一番の難物は米

俵の運搬であった。開拓義勇軍出身者は以前は農業に従事していたのであまり苦にならないようだったが、私は日ごろ、重い物などほとんど担いだことがなかったので本当に大変な作業であった。

その糧秣運搬が終了したのは八月五日ごろだったと思う。夕食後、仲の良かった秋田県能代市出身の友と眺めの良い丘に出てよく語り合う機会があったが、その時は、これからの幹部候補の受験のことが一番話題になっていた。それとこれだけの施設を作ってまた部隊に戻るとなるとこの施設はどうなるのだろうかなどと疑問が出てきた。作業が終わったので自由な時間が少しずつ多くなったので私達新兵は戦陣訓などの勉強の時間ができたので一生懸命に暗記した。

八月十五日ごろだと思うが、夕食後の薄暗くなったころ、丘から眺めているとはるか遠くに飛行機が三機飛びながら照明弾を落としているのが見えたので、それは夜間飛行の訓練と思っていた。その翌日になって駅に居て資材を管理している二

十人ぐらいの古兵と連絡が取れなくなったので様子を見てくるようにとの中隊長の命令で上等兵と私ともう一人の新兵の三人で斥候にかけた。駅の見える丘の辺りからのぞいて驚いた。駅の付近はソ連の戦車群に占拠されてしまっている様子で、友軍の兵士は誰も見ることができなかった。おそらくソ連軍と激戦を展開して全滅したものと思われる。早速、山に戻り報告したが、この時点で幹部はソ連が満州に侵攻し始めたことも終戦になったことも承知していなかったように思われた。その後はソ連の戦車が山に向かって進んで来た場合は道路の両側に隠れていて攻撃をする計画がたてられたが戦車は山に入って来なかったので幸いだった。

八月二十日ごろと思うが、中隊長からの伝達という形で「日本は戦争に敗れた。今後のことは指示するまで待機するように」と中隊全員に対して命令が下った。これを聞いた兵士達は一様に、一体どういうことだ、何がどうなったのだと不満や

るかたない様子で騒然となった。話の中にソ連が参戦して満州に攻撃を加えて来たということが分かったが、当時の私達の記憶では日本とソ連との間には「日ソ中立条約」が締結されていたのになぜ参戦してきたのか疑問でならなかった。更に東條英機が示達した「戦陣訓」には「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」とあるのでもし捕虜にでもなるようになったら我々は自決させられるのではないかということもささやかれていた。

身の回りを整理しながら次の指示を待っていたら一週間ぐらい経って「これからソ連軍に投降するので上官の指示に従い整然と行動すること」という命令が下った。いつの間で作ったのか大きな白旗が掲げられた。白い敷布を二枚つなぎ合わせたものを三メートルぐらいの長さの木の枝にしぼりつけたものである。その白旗を先頭に山を降り始めた。兵隊の間ではもうせっかく作った陣地もこれで見納めだな、この地には二度と来る事がな

いからよく見ておくか、とか思い思いの考えをめぐらせながら歩いて行く。山麓のトロツコのレールの敷かれている所に着くと、そこで銃や帯剣を取り外して数えやすい数に一把ずつ縛りこんでレールのわきに積んだ。今までは天皇陛下から賜った銃だから命より大切にせよと言われていたのに、今はそこいらの丸太棒と同じ様な扱いに少なからぬ矛盾を感じながら言われるままに命令に従っていた。丸腰になった隊列は近くの学校の校庭に向って歩き出した。学校の校庭に着くと、そこにはソ連の戦車や兵士が群れをなしていた。日本とソ連の幹部が通訳を通して話し合いがなされ、その後これからソ連軍に降伏して武装解除が行われるので従うようにと命令され、武装解除が始まった。ソ連兵は全員小銃を携行して肩から下げていて丸腰になった日本兵一人一人の身体検査を始めた。まず刃物など危険と思われるものはすべて取り上げられ、その次にほとんどの日本兵から時計と万年筆が取り上げられた。中にはソ連兵などに

渡してたまるものかと時計を靴の中に隠す者もいた。この武装解除は我々日本人にとつては言い難い屈辱感を味わされた。改めて人員点呼を受けて出発し、どこへ行くのか分からないままに行軍を開始していった。

山を降りる時に今後の事を考えて食糧は持てるだけ持つように言われ、軍足に米をぎっしり詰めて二本持ち、その他に毛布なども持っていたので背のうの重さは相当なものになっていた。八月末の日差しは容赦なく我々を照りつけ足の重い行軍に何とも説明しようのない重圧を加えていた。まるで死地へ追われる四人の群れに似て、ただ言われるままに苦渋の行軍を強いられていったのである。

四列縦隊の隊列を組み、軍服、軍帽ではあるが下を向きながら歩く姿は蟻の行列を思わせる長蛇の列である。歩くほどに出発時の元気はなくなり三十分も経たないうちに汗だけが玉のように流れ出て衣装は文字通りびしょ濡れになってしまつて

いる。特に私達のように重い物を背負つての行軍などまったく不慣れで、正に難行の一つでもある。第一回の休憩を待たずに背中への貴重品を恨めしくも放棄する者が始めるといふありさまであった。一時間ぐらゐの行軍のあとの休憩は名状し得ない不可解な喜びであつた。足の疲れを少しでも癒そうと身体を横にして足を高い土手にあげる者、水のある所を見つけて咽を潤す者、靴を脱いで足の裏を点検する者など、その態様はいろいろであつたが、長くない休憩時間を惜しみつつ溜め息をついていた。また持つている荷物の重さに閉口して少しずつ整理して必要度の少ないものから投棄しだしていた。

その後しばらく歩いてその日の露営が告げられた。そこは原野で、我々はその道沿いに行軍体形のまま露営を強いられた。みんなで大急ぎで炊飯して夕食を済ませ、疲れた身体を毛布にくるみ互いに背中を寄せ合つて横たえる。星空のもとはあつたが夜中には冷気が忍び寄り睡魔を妨げよ

うとするが、日中の疲れで、ぐっすりと眠ることができた。冷え冷えとする二日目の朝を迎えた我々は、それぞれ手分けして炊飯を終え朝食をとる。副食は缶詰だけだが、ぜいたくは言えないのでみんなうまそうに食べた。朝食が終ると二日目の行軍に入った。他の中隊の様子を見ると背負っている荷物に、上にゴザを丁寧に巻いて持っている兵士を見かけた。先を見越して持ってきたのだろうが感心させられた。戦争に敗れた丸腰の落ち武者の行列、この悲哀の行軍もそばから眺めれば、あるいは一種の乞食行列に見えたかも知れないほど哀れなものであった。長蛇の列は坂を上り、坂を下り、まったく当てる分からない行軍が続いていった。五日目くらいだったと思うが国境地帯の地図に詳しい者が「金蒼」の方向に歩いているようだと言っていたが、金蒼がどこにあるか知らない者が大部分である我々にとってみれば、ただ疲れた身体を命ぜられるままに動かしているに過ぎなかった。七日目ごろ、連日の行軍で疲れ果てて

トボトボと歩いている先に拵がりを見せている丘陵地があり、友軍兵士が多数休憩していた。先着した彼等はここに駐留して大休止しているらしくった。彼等に地名を聞くとそこが金蒼という所であることが分かった。到着後間もなくここでしばらく休めることが達せられ、皆ほっとしたが疲れを休める暇もなく幕舎作りを始めた。幸いに私達の中隊は各自に小型の天幕布地を分担して持たせてあったため簡単に作ることができた。これだけは他の中隊は持っていなかったので羨ましがられた。夜になり睡眠に入るころ、皆が身体が痒くないかと言い出した。翌日目が覚めてシャツを脱いでみるとほとんどの者がシラミの寄生であった。陣地を出てから連日大汗をかくが入浴もない生活であればシラミの寄生も当然と思われた。それからはこちらで裸になりシラミとりの姿が見られた。使役で動き回っていると私の名前を呼ぶ人がいるので振り向くと会社の同僚で、吉林の別の部隊に入隊した二人で吉原君と越前谷君だった。

お互いに「元気か」と声をかけ合い身体に気をつけて頑張ろうと励まし合って別れた。先に到着した部隊の中にはドラム缶で入浴している者達もいて我々を羨ましがらせた。また雨が降ると天幕の中に水が流れ込み、排水の溝掘りなど金蒼での逗留も様々な形で我々を揺さぶった。

この金蒼を出発する前に大隊の編成替えが行われた。目的は何の為か分からないが五百人ずつに編成するというので我々の部隊はバラバラに分散されてしまった。入隊以来寝食を共にしてきた者達が別れ別れにさせられてしまった。私は召集兵の部隊で二等兵という新兵が一人もいないところに数合わせ的にただ一人入れられてしまった。この編成替えが私にこれから先、地獄の生活を味わわせる原因となった。使役となるとほとんど私一人が出され、食事の分配になると私の分はいつも他の兵士の半分ぐらいで、時には屁理屈をつけて全然支給されないこともあった。要するに軍隊の階級支配の横暴である。行方を知らされないまま

に金蒼を出発したが大方の予想では行き先は琿春だろうということだった。行軍が小さな部落にさしかかったときである。その住民達が列に目掛けて一斉に石を投げ出した。家の壁には「抗日」と一際大きな字で書かれていた。今までの日本が行ってきた圧政に対する抵抗であろうが、一切手だしをすることが出来ず敗戦の悲惨さを現実にした場面であった。また行軍が坂道の曲りの所にさしかかると異臭が鼻をついてきた。良く見ると道路に沿って戦死した友軍兵士の遺体が放置されているのに出会った。見ればいずれも真新しい上着を着用しており、星一つの襟章がほとんど汚されないで残っている編み上げ靴も新しいし、巻脚絆も新品できちんと巻かれていた。半ば前かがみの状態で転がっている、間違いなく新兵さんで、身体つきから補充兵か召集兵と思われる。しかしソ連側の指示で遺体処理もできない。腹立たしく思うが丸腰の我々にはどうすることもできない。

更に下り坂にさしかかると今度は道路上に等間隔

で馬曳きが倒れていて異臭を放っていた。恐らくソ連軍と友軍が激しく戦った場所と思われる。この時疲れた頭をよぎったのは、もし自分達の部隊がここに駐屯していたらと考えると身の毛がよだつ思いがした。

九月になると夜の冷え込みが大分身にしみるようになってきた。でも昼間は残暑が厳しく炎暑の中での行軍は相変わらずの難行であった。連日の行軍で足にマメの出る者が多くなり、休憩の度に衛生兵に切開してもらいヨードチンキが塗られる。よほど痛いらしく跳び上がっている者もいるが歩かなければならないので、疲れと痛みの、さながら死の行軍となった。私は足にマメができなかったのは不幸中の幸いであつた。こうした行軍の中で炊飯は大変だった。沿道には草地の場所が多く枯草などが見当たらない。枯草で炊飯しても中々炊き上がらず半生の飯盒をぶら下げて歩くより仕方がない。次の休憩地のことが気がかりだったが琿春の町に入って間もなく着いた河のほとりが宿

営地と決まりホツとした。その辺りには炊飯に使える木の枝などがあり水も十分だったからだ。しかし二等兵の私はすぐ使役に出される。大隊本部からの糧秣受領である。更に炊飯にとりかかる。炊き上がった飯は班長や上官から分配される。私はいつも余ったものだが、たまには一人前の量が

当ることもあつた。夕食後の後片付けもそこそこに疲れた身体を横たえて毛布をかぶっていた。うつらうつらしたところ、私の身体を叩く人がいた。毛布から顔を出すと柏木上等兵で、私の中隊から大隊本部に物資の配給などのため派遣されている人だった。「平久保二等兵か」と確認してから私が「はいそうです」と答えると自分の雑囊からサバ缶を一缶取り出して、これをお前にやるから他人に分からぬよう明日の朝まで一人で食べてしまえと言つて足早に立ち去つて行つた。恐らく私が使役にばかり使われて満足に食事をしてないことを察知して私に対しての温情溢れる行為と解釈した。誠に地獄で仏様に会つた感じだった。その柏木上

等兵は下痢の症状が悪くなり隊列を離れてしまったことを後で聞いた。

琿春の河原を後にした我々は、程なくソ連の境界を越えることとなった。そこで目にしたのは破壊された橋梁である。橋という橋は半壊状態で交通を遮断している。日本軍の侵入を阻止するための布陣であることは言を待たない。壊された橋の部材は炊飯用の薪に重宝に活用された。こうして連日の行軍もポセツトという港町近くの草原で大休止で終止符をうつこととなった。数日経過して衣類も新しいものが支給されてシラミもいなくさっぱりしたのでお互いの会話は、これで帰国になるんだなあと思うのは無理ならぬことであつた。全員出発の支度が終ると、いつになく厳格なソ連側の警戒、引率のもとに発進した。誰もがポセツト港に直行するものと思ひ込んでいた。ところがそれは、お目当て違いで、しばらくすると鉄道の引込み線のあるところに誘導された。そこには有蓋貨車の長い列が停まつていた。その車両列に沿

つて停止した我々は、到着後数分で乗車を命ぜられた。あまり掃除もしていないセメント運搬車のようであつた。乗車と同時に行先が気になりだし、誰かが「ポセツトから乗船でなくウラジオに行くんだらうから、もう少しの辛抱だよ、頑張ろう」と独りよがりの話しつぷりに皆の気持ちを文句なくその方向に引つ張つてしまふのだ。乗つたのはよかつたが車両は一向に動く気配を見せない。やがて夜になりゴトーンという音とともに動き出した列車はウラジオと反対に向つていと皆に伝わってきた。「どこへでも行きやがれ、勝手にしろ」と言う者も出てきたし「まったく胸糞悪いや、寝ろ寝ろ」と腹立たしげに叫んで、また身を横たえる者もいた。我々を乗せた列車は一日中停まらずに走つてみたり、一日中停まつてみたりして大小便の排泄にも影響するようになった。当然車内は臭気が漂いだし不健康な状態になつていった。

そんな状態で列車は行先を知らせないでただ走り続けた。何日走り、何日停車したか分からない

が、停車して降りるように言われた所は山林の中でチラチラと雪がチラついていて。時期は既に十月に入っていた。貨車から降りて少し歩いた所に塀に囲まれた建物が見えてきた。これがその後我々が起居生活を行う収容所であった。板塀を高くめぐらし四隅には一段と高い櫓があり、それは哨兵が立つ望楼だった。この建物は丸太作りでかつてソ連の囚人の収容所だったという話であった。

身辺の整理や建物の清掃などが行われ、自分の居場所も決められ抑留生活の第一歩が始まった。収容所での一夜を過ごした初めての朝には、投降以來すっかり頭から離れてしまっていたことが行われた。東方の宮城方位に向って全員正座して遙拝をして、続いて軍人勅語の五箇条を声高に唱和しはじめるという現状にそぐわない光景が展開されたのである。上官達はここで軍規の根幹を蘇生させることが日本軍人としての誇りと命令系統を保持するための唯一の方法と考えたのであろうか、また彼等は軍隊の階級支配を維持することにより

自己保身を可能にする必要があつたのではないか。軍隊では規律維持の要に「上官の命を承ること直に朕が命を承る義なりと心得よ」という天与ともいふべき掟があつた。それをそのまま捕虜生活に当てはめようとしたため、それからの生活が兵營時代よりも陰惨な私的制裁が強化されはじめた。

これがどれだけ下級兵士に犠牲を強いる結果になつたか、今更ながら戦慄させられる。日本に帰国のための行軍だとか移動と言われついに山の中の収容所に入れられ、更には軍隊の階級支配の重圧のため夢も希望もない日々の連続となつた。初めは自活に必要な作業も三日過ぎ四日過ぎると大半はソ連が求める本来の目的に添った労働に駆り出され始めた。

最初は鉄道の枕木にするような材木の貨車積み作業だった。食糧も満足に与えずに作業を要求したって働けるものかと皆ぶつぶつ言いながら適当な態度で作業をし始めた。するとソ連の作業係が叱咤するならまだしも日本の班長(だいたい軍曹)

がもつと気合いを入れて働けと言ひ出し反抗的態度をとつた者に対して殴る蹴るの暴行にでてくる。しかしそれに対しては黙つて従うしかない。まるでソ連の回し者みたいな振るまいである。またいつも空腹を抱えての生活なので食事のときはその分配に皆の神経が集中させられる。分配する古参上等兵は曹長や班長に多く下級兵士には少なくと不公平な分配をするが班長達はそれを黙認する。初めのうちは仕事が次々と変わる。今まで全く経験のない森林伐採作業が課せられた。作業開始が八時、従つて作業現場に着くまでの時間を見計らい収容所が出るがシベリアの冬の夜明けは遅く日没は早いため出発の朝はまだ暗い。その中で的人员点呼のためか一度や二度の計算で人員数が合わないため何度もやり直す。毎朝毎朝、何度も数が合うまで立たされている側はたまつたものではない。満たされない腹と、靴底から伝わってくる寒さに身体を震わせながら捕虜としての扱いにみじめさを実感させられた。

現場に着くと二人一組となり器材が割り当てられるが古年兵が良さそうな鋸と斧を先にとり、残つたのが私達が使う事になる。鋸は二人挽きである、作業は先ず隣の組との距離を十分にとりながら伐る木を選定する。いくら細くても四十センチ以上はあつたろう。枝の張り具合や周囲の状況などを見定めて倒す方向を決めると、その方向に鋸の引き目を入れ斧で切り口をつけて倒れやすくして反対側から鋸で引いてゆき一本の木を倒すのに三十分以上はかかる。鋸が直径の半ばを過ぎたあたりから倒れる方向に注意し声を掛け合いながら挽き進めると木は徐々に傾き地響きをたてて一気に倒れてゆく。倒した木は枝を斧で払い落とし幹は切り落とし、枝はその場で集めて焼却して一本の木にかかわる作業は終るのだが、同じ作業を夕方まで繰り返して一日が終わる。帰りには冬の間は宿舎の暖房に使用する薪を一口ずつ斧の先に打ち込み肩に担いで帰る。私達にとつては精いっぱいの仕事量だが果たしてそれがノルマになつ

ていたかどうか、ソ連の作業監督の、木の切り口が高いとか枝の片づけが粗雑だとか口汚く罵る声だけが今もはっきり記憶に残っている。初冬のころだったが、冬の被服が支給されたが班長がまた下級兵士のイジメに走り夏物のまま作業に出したもので、作業に出た者が殆ど凍傷になってしまい、責任を問われて困り果てていた班長の様子も思い出される。宿舎の寝台には細かい穴がたくさんあって、それが南京虫の住みかになっている。疲れて寝ているのに南京虫に刺されて痒くて起こされてしまう。皮膚の弱い者は化膿して腫れてくる。私の首には今も硬いシコリが証拠みたいに残っている。

一九四六年の一月ごろだと思うが身体検査がありオ・カと判定された。身体検査はソ連の医師（ほとんどが女）が健康状態を診断して、四等級に判定する。一、二級者は屋外の重労働、三級者は室内の軽作業、さらにオ・カという級があつて、オ・カに判定されると体力が回復されるまで休養とな

る。私はこの身体検査で収容所を移動することになり、殺人梯団とまで言われたムーリー百十一収容所を去ることになった。もちろん、部隊の編成替え以来、地獄の鬼みtain上官達とも「アバヨサヨナラ」となり、心の中で万歳を叫んだ。

私の移動先の収容所は四十二収容所で、主な作業はやはり伐採作業であつたが、私は収容所本部の仕事が割り当てられた。ここで当番として働いていた約三カ月がそれから先の私のシベリアの生活を大きく変える原因となつた。本部には小林茂利松曹長と宮迫定夫通訳と小林嘉吉という先任当番と私が四人で居住することになり、私は小林嘉吉さんの指示で行動しましたが掃除程度の雑務で身体に負担のかからない仕事でした。

小林嘉吉さんは更に私に「そんな衰弱した身体では日本に帰れなくなるぞ、今後何かの役にたつと思うからロシア語を覚えなさい」と言つて毎日暇をみてはロシア語を覚えてくれました。一月月もすると作業量記入表に収容所全員の氏名をロシ

ア語で書けるようになり、また食事のメニューなども書けるようになりました。丁度三カ月くらいたったころソ連の都合で四十二收容所が閉鎖されて、二〇一收容所に合併になり、その時の身体検査で二級に判定され一般作業に出るようになりました。身体検査の方法というのは、私達の場合、ソ連の女医の前に素裸で立たされ、一通り身体を眺められたあと回れ右をさせられ、女医が臀部の皮膚をつまんで判定するという原始的で腹立たしい検査で、それでクラスの判定が下される。栄養失調で衰弱すると皮下脂肪がなくなり皮膚がたるんでくる、そのたるんだ皮膚を掴まんで弾力をはかり、弾力のあるなしで一級からO・Kまでの判定を下したのである。またシラムの繁殖防止を理由に陰部の毛をバリカンで刈られたあとに女医の前に立たされたときの惨めさと屈辱感は今だに忘れられないでいる。あの惨めな姿をさらす哀れさは、抑留者でなければ体験できなかったと思う。

酷寒シベリアにも四季があり、多くの抑留者を

死に追いやった零下四〇度、五〇度の気温も徐々に遠のき春が訪れてくる。そのころになると防寒のため着ていたフアイカと呼ばれる防寒外套やフェルト製の防寒長靴、耳カバー付の防寒帽、親指のついた防寒大手袋が薄くなっていく。そして何よりも酷寒から解放されるという気持ちがあらずつ和んでゆく、そして精神的に落ち込み無口になっていった者達も少しずつ口数が多くなっていた。

一九四六年夏ごろだと思いが收容所に「日本新聞」が配られるようになった。この新聞はハバロフスクで発行されソ連側の編集長はコワレンコと言い、編集員が七、八人で日本側の責任者は浅原正基であったということを復員してから知った。新聞の内容はレーニン・スターリンの肖像画がやたら多く、レーニン主義は万人の教えであり旗である、という宣伝や、日本はアメリカの三S政策（スポーツ、セックス、スクリーン）で骨抜きにされてるといふ記事や、日本軍国主義、祖国日本の

天皇制打倒や人民政府樹立などが、羅列されていた記憶がある。收容所内にも民主グループが組織され、壁新聞が貼り出されたり反軍闘争が湧き起り徐々に在ソ民主運動の基礎的なものが作り出されていった。民主運動が活発になり、軍隊の階級章をはずすようになり更に收容所から将校が居なくなり、隊長を自主的に選出するようになった。

そのころ收容所内で通訳の手伝いにロシア語を書ける者がいないかと探していたので、少しぐらいなら私が書けますと名乗り出たらすぐに採用され、通訳の手伝いとソ連側の管理事務所と両方で働くようになった。この仕事は約六カ月続いたので、この間に自分の身体が少しずつ回復するのが分かったし、ロシア語の会話も記述も少しずつ上達した。ソ連の管理事務所は收容所の外にあるので私には守衛所を自由に通過できる外出証が渡された。管理事務所にはソ連に政治犯で流刑されたという經理担当者が一人居て、よくロシア語の算盤と日本の算盤とで計算の競争を行ったが、私が日本型

算盤で一度も負けることはなかった。特に割り算の計算方法には驚いていた、また時々食糧やタバコを私にくれるので肉体的にも精神的にも虜囚生活で楽な時期であった。

一九四七年の春が近づいたころ、收容所を移動し別の收容所に合併することになった。移動と共に私はまた伐採作業に戻ることになった。そこでは伐採作業ばかりでなく材木の搬出作業材木の貨車積込作業もやらされた。材木の搬出は馬を使って搬出するので馬を操ったことのない私は馴れるまで苦勞の連続であった。

また貨車への積込作業は夜間作業になることもあり、冬期は足元が滑り危険が伴うことが多かった。崩れた材木とレールに身体を挟まれて友が一人命を落としてしまったのも夜間作業の時であった。

一九四八年暮れには体調が悪くなり発熱したが、三七度ぐらいの熱では休ませてくれない。一月月ぐらい体調不良のまま作業を続けていたら三八度

を超えた熱が出て倒れてしまった。真夜中に馬櫓に乗せられて病院に運ばれたが零下四〇度の中で震えが止まらず意識がもうろうとして、気がついてたら病院のベッドの上だった。それでも体力があったのか三日ぐらいで熱が下がり身体が楽になった。最初は肺炎だと言っていたが、十日ぐらいで作業隊に戻されたことを考えると何だったのか不思議だったし、よく持ちこたえたものだ。病院の中は静まりかえっていて気持ちが悪く、隣の人もほとんど話したことはなかった。病気がりでも作業隊に出されたら一人前の仕事がすぐ与えられた。仕事は馬の飼料の運搬作業であった。ふらふらしながらも徐々に体調を慣らしていった。他人に文句を言われようと気にしないようにしていた。六月下旬になったころ、帰還収容所に移動するといって貨車に乗せられた。また「ウソ」だろうと思っていいたら着いた所は港町だった。ナホトカであった。夢ではないかと思ったが夢ではなかった。奥地から次々と貨車で仲間が運ばれてくる収

容所はすし詰め状態で、夜寝るときは狭くて大変だった。理由は引揚船が遅れて来ないからだと言っていた。日中は相変わらず近くの作業場で働かされた。

二十日ぐらい待たされてやっと順番が回ってきた。すると民主運動のリーダー達の指示でスターリンに対しての誓約文に署名せよというのである。それは「日本に帰ったら日本共産党に入党します」という誓約書である。私達はソ連に不法に抑留されて早く母国に帰りたいかった。帰ってしまえばこっちのものだという考えから署名したが、本心で署名した者は何人いたろうか。

いよいよ乗船の日が来ました。引揚船は英彦丸という船だった。名前を呼ばれてタラップを昇っていく気持ちは何とも言えなかった。船上で乗組員が「御苦労様お帰りなさい」と迎えてくれた時は涙が出るほど嬉しかった。特に夕飯に出されたカップ一杯の白米の味は今でも忘れられないくらいおいしかった。引揚船の中では民主運動のリー

ダー達によるアジ演説や赤旗の歌などの労働歌や革命歌を次から次に音頭をとって意気の高揚をはかっていく。船中で就寝になつてもなかなか寝つかれない。両親や兄弟は皆元気でいるだろうか、特に身体が弱かつた母は元気で生活しているだろうか、とても気になった。また抑留中の不潔な生活で四年間一度も歯磨きをしたことがなかつたためボロボロになつた歯がすぐ治療できるだろうか、敗戦の日本に働く仕事があるだろうか不安ばかりが頭をよぎる。また労働者農民の党であり国であると言いながら、よくも我々日本人を人権無視の状態で酷使したものだというソ連に対する恨みの気持ちも高まつてきた。

引揚船英彦丸は日本海を順調に航海を続け船内でも騒乱などなく七月二十日を迎えた。甲板にいた者が「日本が見えるぞ」と叫んでいる。船内から皆がぞろぞろと甲板に出て行く。遠くに緑の山道が見えている。そして徐々に大きく見えてくる、段々畑が見え、家が見え、日本に着いたぞ、日本

に帰つたぞ、と皆で叫んでいる。二千人の引揚者を乗せた英彦丸は舞鶴港を通過し東舞鶴港の錨地に静かに着いた。しばらくするとハシケが次々に英彦丸に横付けになり引揚者を平棧橋へと運んでくれた。私もハシケから平棧橋に第一歩を踏んだ時は言葉も出さず胸が熱くなるのを覚えた。援護局員の誘導で引揚寮に到着し帰国の手続きになる。古い衣類を脱ぎ大浴場で入浴が終ると全身にDDT消毒散布をされ、新しい衣類に着替えるという流れ作業でさっぱりした。引揚寮に入った二日目、少し離れた施設の個室に呼ばれアメリカ軍の関係者からソ連における軍事施設その他について知っていることを報告するように言われる。しかしほとんど山の中で伐採していた身でそんなものが分かるはずがないのにしつこく聞かれた。相手は日系二世であつたが、その態度には好感がもてなかつた。引揚寮の一部に家族から来ている手紙を収納してあつて自由に探せる所があつたが、私は残念ながら見当たらなかつた。引揚寮に入つて

四日目の朝だと思いがいよいよ故郷に向つて出発した。トラックの荷台に乗せられ東舞鶴駅まで行き、青森行きの汽車に乗る。駅のホームは地元の人達の見送りで人の波だった。”お元気で“ ”お元気で“ の声に送られて汽車は出発した。車窓からはなつかしい日本の町や村、山や川が目に入ってくる。そして駅に停車するとその地元の人々の見送りを受けた。やがて汽車は青森に着き青函連絡船に乗り継ぎ函館に向う。連絡船が津軽海峡に出るころに甲板に上つて見ると夕暮の海に函館山がぼんやりと見えてきた。四年ぶりに見た函館山を眺めながら頑張り抜いたシベリアの嫌な思い出が浮かんでくる。だんだん山が大きく見えてくる街の明りもはつきりしてきた。船は穏やかな函館港に静かに入つてゆき岸壁に近づく。岸壁は大勢の出迎えの人達で黒山になっている。皆で手を振っているの顔がはつきり見えない。船が着岸したが私は家族を見つけれないままタラップを降りていった。するといきなり左腕を引っ張るひ

とがある、父だった。そしてぐいぐいと引っ張つていく、栈橋の構外に出たところで共產党員がアジ演説をやっていた。すると父は更に強く引っ張つていく、その時私は何でこんなに強く引っ張るのか気がついた。父は私がシベリアで赤に染まっていると思つたのだ。後で話を聞いたらやはり私が赤化していると心配していたようだ。家に着いて母の顔を見た時は本当に安心した。兄弟も皆元氣だったし万々歳だった。食卓には母の心づくしの赤飯が並べられて家族全員で私の帰宅を祝つてくれた。家族の話によるとソ連の引揚者は抑留中にマルクス・レーニン主義の思想で洗脳されてい

て要注意だったと言われていて、先に引き揚げてきた者達がいたので心配していたと言うのである。私は家族に色々と教育はされたが、考え方は以前の自分と変りなく思想的には染まつてはいないから心配しないでくれと話したら安心したようだ。家族に心配させないようにそれからあまりシベリアの話はしないように心掛けた。我が家でゆっ

くり寝かせてもらい翌日は気持ちの良い朝を迎えた。父から今日は私の事を心配してくれていた人々に挨拶回りに行くと言い二人で一日中挨拶に歩いた。皆さんが本当に無事の帰還を喜んでくれて嬉しかった。

その後、就職の話があり履歴書を書くときシベリア抑留のところは削除するように言われ出し直したが駄目だった。二度目に函館市役所の臨時職員の話があり履歴書を出したらやはりシベリア抑留のところを削除するように言われ再提出したら採用され、その翌年に職員採用試験を受けて合格し、以後三十年間市役所に勤務することができた。

私は昨年傘寿を迎えました。「シベリア二〇一友の会」に昭和五十四年に参加し、昭和五十七年「ソ連における日本人捕虜の生活の体験を記録する会」が結成されたとき、会員百四十一人中北海道からただ一人参加しシベリア関係の運動に関わってきましたが「二〇一友の会」も一時は九十人ぐらいいた会員も親睦会に四、五人ぐらいしか来

られなくなり、平成十年に解散し、また「体験記」も全八巻が平成十年に完結し「菊池寛賞」を受賞し目標を達成した。これからは私達はシベリア抑留という事実が風化されないよう機会をとらえて後世に伝えていく努力をするつもりです。

【執筆者の紹介】

現住所 北海道函館市谷地頭町

生年月日 大正十五年一月三十日父栄次郎

母イネの次男として生れる

学歴 昭和十八年十二月 北海道府立函

館商業学校卒業

職歴 昭和十九年一月 満州国本溪湖煤

鉄公司に入社

軍歴 昭和二十年五月 公主嶺関東軍二

五二二四部隊に入隊

昭和二十年八月二十八日 汪清の

小学校の校庭で武装解除

昭和二十年十月 ムーリー地区一

一一収容所に入る　その後　八カ所の収容所を移動

昭和二十四年四月七日　ナホトカ

出港

昭和二十四年七月二十日　英彦丸

にて舞鶴上陸復員

復員後　昭和二十四年九月　函館市役所に

勤務

昭和五十六年六月　函館市役所退

職

昭和二十七年　妻みどりと結

婚、長男は札幌市在住のため、夫

婦二人で生活

市役所退職後はシベリア抑留者関係で函館地区の役員。また北海道ゲートボール連合評議員、競技、審判委員等更に老人クラブの役員等多忙な日々を送っております。

体調については日常生活に支障がないと聞いております。

平成十七年九月に函館市内で開催致した「語り継ぐ集い」には自ら抑留経験談を語り、大変協力をして頂きました。

(北海道　森　英一)